

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒190-0013
東京都立川市富士見町2-12-13 安藤ビルB1F
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up, TOHOKU!

2012年(平成24年)11月16日 金曜日

無料

第6号

毎月発行

創刊2012年(平成24年)11月16日金曜日

東北復興を考える前に考える 『東北って何だろう?』 『東北人って何だろう?』

「東北」は心の底から復興の遅れに怒っているのだろうか、ありえないとは思いますが、仕方ないとあきらめてはいないだろうか

単純にメディアが取上げないだけで、ほんとうは怒り心頭なのだろうか。震災発生から一年半以上も経ったのに、なぜ東北の復興がこれだけ遅いの、被災地や被災者がものすごく怒っているという記事を見かけることがほとんどないのだろうか。そして怒りを集団で表明することがほとんどないのだろうか。ましてや、復興予算の使われ方も大いに問題があることを報道されても、大きな怒りの声がうねりとなって出て来ないのはなぜだろうか。そのような疑問についてずっとあれこれ考え続けてきた。これだという答えが出てきたわけではないが、何となく腑に落ちる部

分も頭のなかに湧いてきたので、この記事にまとめることにした。この記事のアプローチが正しいのか、あるいは、答えの一部になっているかどうかは読者のご判断に委ねようと思う。また、この記事に対するさまざまな批判、お叱りも覚悟で提示したいと思う。

最初にお断りしておくが、当新聞の基本スタンスは、「東北の復興」がいち早く実現すること、そして復興によって、以前よりもすばらしい「東北」を作り上げていくことである。けっして復興について茶化したり、批判的なスタンスを取っているわけではない。

ヨーロッパの独立問題 ～ スペイン・カタルーニャ州独立機運高まる

スコットランド独立に関する住民投票が二〇一四年に実施されることが決定したという記事が出ていた。再来年のことだが、イギリスにとっても、EUにとっても、その投票結果は大きな話題となるだろう。

フランスとスペインの国境にあるバスケット地方の独立運動も知られている。また最近では、バルセロナ・オリンピックで有名なナ・オリピックで有名なナリ、日本人も大好きなアントニオ・ガウディが設計したサグラダ・ファミリアがあるスペインのカタルーニャ州でも独立騒ぎが起き

ている。ヨーロッパはいまでも民族独立の気運があちこちでくすぶっている。

事の発端は、今般のスペインの財政危機問題。スペイン国債の買い支えと引き換えに、スペイン中央政府が、カタルーニャ州など各地方政府へかなりの経済的なしめつけを行うとともに政治にも強力介入するといふ予測があり、それに反発しての動きというのが表面の理由。カタルーニャ州は、他州に比べれば財政状況はまだましな方で、他州の面倒をみるのはいやだという面もある。しかし根はもっと深い。

もともと言語的にも、歴史的にも、文化的にもカタルーニャはスペイン国内でも独自性が強く、この際一挙に独立機運を盛り上げて行こうということもある。

スペイン総人口は約四千六百万人強、カタルーニャ州は、約七百三十万人で、約二割。経済規模もスペインGDP全体の約二割、約二〇兆円。これはオーストリアの約二兆八兆円、デンマークの二三兆円に匹敵する規模である。この独立騒ぎは、スペイン国内だけでなく、EUにとっても大きな問題になりそうな気配である。

民族というのは理念にすぎない

ここで少しアングルを変えて、「民族」というこ

とを考えてみよう。

世界にはさまざまな民族がいるとよく言われるが、そのときの「民族」というものは正確な定義とならなかなかむずかしいのではないかと思う。

生物学的な側面からすれば、何世代も何十世代も純粋に同一民族内でのみ婚姻関係を維持し、他民族との混血を徹底的に排除し、民族の純血を維持するなどということは不可能に近い。

人はいつでも、どんな障害があつたとしても、どんどん移動する。そして他地域の人間と交流する。加えて、海外との交易もあるが、それは現代人が想像する以上に古くから存在する。日本でも、縄文の時代から海外取引があつたと言われている。人の移動があつて、交流があつて、海外交易もあつて、民族の生物学的同一性が完璧に保持されることは考えにくい。

結局のところ、かなり強引な推論であることを承知で言えば、「民族」とは、特定の言語や歴史、文化を共有し、比較的長く特定地域に住む、あるいはその土地に深く関係する人々の理念でしかないのではないかと思うのである。

確かに、他「民族」と比べると、ある「民族」の生物学的な特徴が大きく異なるため、明確な別民族のように見えるかもしれない。しかし、これも極端な例同士を比較した場合に分

かることであり、例えば、EU内で言われている「民族」を外見からすべて言い当てることなど不可能だ。

また、何世代も同一地域に暮らしている「民族」の比率が高いケースも考えられるが、これも正確な調査など存在しないので、居住期間で民族を正確に判定することもむずかしい。

では東北ではどうか。ここには「東北人」という民族が存在するわけではない。はるか昔の東北には、「東北人」と呼べるような、比較的混血の少ない系統があつた可能性を否定はできないが、いまではそうした可能性を追及する手立てさえないのである。

その後は日本国内ないし東北で人の移動と混血は数え切れないほどあつたことだろう。東北から全国へ、全国から東北へ。あるいは、朝鮮半島や大陸からの移民が東北にやってきたかもしれない。あるいは、「アイヌ民族」との混血もあつただろう。辿ることなど不可能なほどの幾多の混血を経た、いまの東北に住む人々があるのだ。

一例を挙げれば、戦国時代に割拠した東北諸藩の武士集団やそのリーダーも他国からの移住者であつた。多くは、鎌倉・室町時代に関東から移住したもので、すなわち、伊達氏、佐

「東北人」の定義

こうしたことから、「東北人」を定義するのにもむずかしい。何代も前から東北に住む人、東北の出身者で他地域に住む人、他地域から東北に移住した人、さまざまな人が「東北人」といえる。でもあくまでそれは「民族」ではない。

結局のところ、これも前記のようにかなり強引ではあるが、民族性の問題ではなく、「東北人」とは、東北の言語や歴史、文化を全部あるいは一部を共有し、比較的長く東北に住む、あるいは東北の出身者、さらには東北に深く関係する人々という理念でしかないのではないかと思うのである。

ついでに「東北人」の定義に加えていいたいことがある。それは「祭」である。大震災直後に、東北の多くの被災地で、まず地域の祭を復活させよう、継続させようとしたが、面白いことに、復興を願う心と祭を復活させようという心情の関係は、他地域からはよく分からないという声もある。だとすれば、「東北人」の定義に、東北の祭を共有する人というのを加えるのもいい。

ともあれ、この「東北人」という理念を共有する人々が、今後の東北の復興を担うのは紛れもない事実である。筆者の個人的な考えではあるが、あまり「東北人」の定義を狭めると、復興活動の力や範囲や手法に限界が発生する懸念がある。小さくまとまった「東北」を望むとは思えない。他方、拡大しすぎると、活動が拡散してしまう。

いずれにしても、復興の担い手としての「東北人」は明確にしておく必要はあると思う。

「東北」という言語は新しい。明治維新以降の話だ。他方、スペインのカタルーニャは、十二世紀からの出現で、あちらの方が歴史が古い。スコットランドはもっと古く、五世紀には現在のスコットランドの北西部に出現したとも言われている。

わが「東北」は、明治以前は、古くはみちのく(道の奥)、「奥羽」、「奥州」、そして「東北地方」と呼び名は変わった。「東北」とはまた、単に方向性を示すだけであり、特段の意味はないとも言えるのではないか。呼び名とそれへの愛着度合いは普通に考えれば、深い関係がある。名称に幾多の変遷があれば、愛着も分散すると考えるのが自然だ。そして、この「東北」と呼び名が変わったきっかけでもある「戊辰戦争敗戦」。奥羽越列藩同盟の敗戦と

にも出現した「東北」という名前には、最初から前向きで積極的な明るい響きは与えられていないとも言える。さらに、明治維新以降には、敗戦に伴うさまざまな制裁措置があつた。それはいまも続いている。加えて、敗戦の責任論もあり、会津藩は善戦したが、仙台藩が悪い、秋田藩が悪い、南部藩が悪いなどと、まだ心底からの仲直りが出来ていないのかもしれない。

そうしたことから、誤解を恐れずに言わせてもらえるならば、この際、お仕着せの「東北」という呼び名を返上するという議論があつてもいいのではないかと考えるのである。震災からの復興も、どうやら、中央政府にも頼り切ることがむずかしい状況のようだし、何もかも新しく、自分たちで選び取るプロセスの中で、呼び名も変えるのはどうだろうか。多くの議論があると思うが、まったく意味がないとは思えないのである。

それで、次の投げかけがこの記事を締めくくりたい。

「東北」という呼び名は好きですか?今後の復興プロセスにおいて、「東北」という呼び名のもとに一致団結することに喜びややりがいを感じますか。

それともこの際、「東北」に替わる名称を作り出し、その新たな旗印のもとに、自分たちの力で復興を実現しようと思いませんか?

「東北」という呼び名は好きですか?今後の復興プロセスにおいて、「東北」という呼び名のもとに一致団結することに喜びややりがいを感じますか。それともこの際、「東北」に替わる名称を作り出し、その新たな旗印のもとに、自分たちの力で復興を実現しようと思いませんか?

石巻漁港と 牡鹿半島のいま

蛤浜、折ノ浜、小竹浜、桃浦、月浦、
荻の浜、小積沢、牧浜、竹浜、福貴
浦、小網倉浜、小淵浜、鮎川近況



石巻漁港 仮設魚市場

十月二日早朝から、宮城県・石巻漁港を皮切りに、牡鹿半島の西側沿岸の漁港を見て回った。中規模の漁港も小規模の漁港も出来る限り多く回った。そのため一ヶ所あたりの滞在時間は短くなったが、数多く見ることのできる地区全体の復旧動向を知りたかったのだ。

石巻市魚町にあった震災前の石巻漁港は、昭和四九年に開港され、水揚げ岸壁の長さ(一二〇〇m)と魚市場の上屋根の長さ(六五二m)はいずれも東洋一の長さを誇り、水揚げ量、水揚げ高ともに日本



石巻漁港 地盤かさ上げ工事



荻の浜 二つに折れた顕彰碑

有数の大漁港だった。しかし、津波により、魚市場は無残にも破壊され、屋根は一〇〇メートルも陸地側に押し流され、近くにあった水産加工団地の工場や冷蔵庫もほぼ全滅した。

その後、復旧のための予算はなかなか下りず、地盤は沈下して震災直後そのままの状態が長く続いた。石巻漁港周辺には、水産加工会社九五社があったが、復興のめどが立たないため、そのほとんどが従業員を解雇した。昨春秋になつてから、沈下した岸壁のかさ上げが行われ、仮設の市場の建設が進み、取引も開始さ

れた。しかし、往時の上屋根の長さ六五二mという規模には遠く及ばないし、結果、取引規模もそれなりのものにとどまるのは仕方がない。震災以降、かなりの取引が他の漁港に移ったといわれている。

その影響は、3・11を一次災害としたら、それに匹敵する二次災害と言える。いつかこの石巻漁港周辺の復旧が実現しても、かつての取引規模が戻ってくる可能性は小さいだろう。どの港も生き残るのに必死なのだ。一旦移ってしまった取引を簡単にお返ししますとは言わないだろう。結局、一次・二次被害という二重のハンディキャップを背負ったスタートがほぼ決定したのだ。この石巻漁港が背負うハンデは、そのまま牡鹿半島の各漁港の水揚げ減少にも直結する。被害の連鎖である。

また、半数以下の漁港ではあるが、共同の牡蠣むき場が新たに出来たところ、建設中のあるところがある。破壊され尽くした場所に唯一ある新設の牡蠣むき場は唐突な印象を与える。また、ほとんどの岸壁は地震と津波による破壊と歪みが残ったままであり、あるいは穴が開いたままの箇所があちこちに見られた。船を係留するコンクリート部分と岸壁の間には大きな隙間が開いていたところもある。加えて、地盤沈下した岸壁のなかには完全に海と化した場所もあり、元岸壁には海藻が生え、ヌルヌルして歩けないし、コンクリート面が見えなくなっているところもある。それ以外にも地盤沈下の影響は数知れず、連なる巨大な土のうで波の侵食を防いでいる状況である。とはいえ、海水の浸食は防ぎようがない。満潮時には海水が満ち、海の一部となる。

これらが、震災からもう一年半以上経った石巻漁港と牡鹿半島のありさまである。この一年半での成果が、ガレキの片付けと仮設市場と数少ない牡蠣むき小屋だけとはあまりにも遅すぎる。一〇〇年プロジェクトをやっている訳ではないのだ。

いままでの手法でやっていたら、復旧・復興するスピード以上に、衰退するスピードの方がいずれ勝ってくるだろう。それでは復旧・復興どころではなく、時間の経過とともに表面化してくる衰退ではないか。

いまでも間に合うかもしれないし、予測される衰退を何とか水際で回避できるかもしれない。いまからでもその可能性に賭けてみるべきではないか。でもそうできる見込みはいまの体制ではゼロに近い。

そんなやりきれない思いを抱え込む取材だった。



小積沢 壊れた土台の上のお地藏さん

この復旧の大幅な遅れ

渡波の万石橋を渡れば牡鹿半島に入る。県道二号線、石巻鮎川線を基本線にして鮎川まで南下し、この基本線につながる支線に入つては戻り、また入つては戻ること繰り返して、牡鹿半島西側の中小の漁港を取材した。蛤浜、折ノ浜、小竹浜、桃浦、月浦、荻の浜、小積沢、牧浜、竹浜、福貴浦、小網倉浜、小淵浜、鮎川と滞在時間はそれぞれ短かったが、一通り取材した。道路も一部にまだ地震の傷あとが残り、ひび割れと亀裂、段差がある。ところどころで工事のために停止を余儀なくされた。

復旧は概して、小さな浜の復旧はかなり遅れ気味で、比較的大きな漁港はほんの少しづつ復旧の兆しが見えてきた。特に小さな浜

の沿岸部は、ガレキの大部分は撤去されているが、建物の基礎が壊れたまま、あるいは屋根だけが残った作業場が放置されていて、震災直後から何も変わっていない印象である。他方、中規模の漁港には巨大なクレーンなどが周囲の景色から異物のようにみ出している。

今回の取材の南端の鮎川は震災前、ホエールランドなどがある観光地であった。しかしいまは人影がまったくない。かつてはにぎわったであろう観光施設は壊れたまま放置されている。漁港とはまた異なるさびしさを感じさせる。



桃浦 復興の鐘



打ち上げられたコンテナ



折ノ浜



小竹浜



竹浜 いまにも崩れそうな岸壁



牧浜



荻の浜 巨大工事クレーン



月浦 支倉常長何思う



鮎川 打ち捨てられたホエールランド



小淵浜 地盤沈下で海水が引かない



小網倉浜 無残に破壊されたままの港



福貴浦 新設の共同カキ処理場

【大室南部神楽】 復活運動経過報告

家も道具もないけれど、おらほの 神楽を復活させようじゃないか!

プロフィール

一九七六年 宮城県石巻市生まれ
一九九五年 石巻高校卒業
一九九九年 東北学院大学卒業
宮城県多賀城市に居住地
普段は魚を売っています。
宮城県石巻市北上町十三浜
「大室」に伝わる「大室南部神楽保存会」所属



佐藤寛氏

●マイナーな伝統芸能、南部神楽

数ある伝統芸能のなかでも、神楽というのは我々のような人が認識しているよりもずっとマイナーな部類であるということを、まずは自覚しなければなら



復活を誓って、何も無くなってしまった大室に集結した保存会のメンバーです

ない。歌舞伎や能を野球やサッカーとするならば、競技人口・知名度ともに、おそらくカバディぐらいの位置付けではなからうか。本来であればこはその詳しい説明から入らなければならぬところであるが、いみじくも前号にて『雄勝法印神楽』の紹介がなされた

神楽のルーツはいずれ、法印さまや山伏が行っていた祈禱や信仰のための舞であると言われ、それゆえ一般の人々が踊ることは禁じられていたという。しかし、ダメだと言われるとやってみたくなるのが人の常で、農民を中心に、隠れて真似事をする者がいたことは事実のようである。蔵神楽などという言葉がその名残で、なんだか、窓の外からは見えないような足元の動きに特化したというアイリッシュダンスのような印象を受けなくてもいい。こうしてひっそりと舞われてきた神楽が民衆に伝播してい



ようやく入手できた生地を縫い上げるのは、仮設住宅に住むおばちゃん達です

くきつかけとなったのが、明治初期の修験道廃止であるとされている。もちろん諸説はあれど、この際に、基本に忠実で、どちらかというところの正統の伝承という印象が強いのが『法印神楽』。民衆の手によつて様々な要素を取り入れ、娯楽色が強くなつていったのが『南部神楽』であると、個人的には解釈している。南部神楽にもたしかに神話を題材とした演目や、式舞と呼ばれる形式的な舞は存在するものの、やはり民話や軍記物を題材としたドラマチックな演目こそが醍醐味であり、南部神楽の独自性ともいえよう。一口に軍記物といつても、いつの時代も人気の義経ばかりでなく、演目によつて平敦盛や佐藤忠信・継信兄弟、はたまた楠木正成といった主人公のチヨイスも実に多く、また、我々東北人にとつてはやや複雑な感情もあるが、坂上田村麻呂が大嶽丸を成敗するというストーリーも非常に人気のある演目のひとつである。総じて『南部神楽』を一言で表すのならば、さ

●マイナーな地域、十三浜

十三浜(じゅうさんば)とは、北上川のほとりから志津川に接するいわば石巻市の最北に位置する地域で、文字通り十三の漁村から成り、ブランドわかめの生産地として一部では知られている。しかし、これといった観光スポットや見所は何も無く、わざわざ来なければ通り過ぎることもしばしばある。また、途中下車する駅などそもそもないという陸の孤島である。コンビニはおろか信号すら一つも存在しないのは、なにも震災のせいではなくそれ以前からの話だ。

●復活にかける思い

それから一年半以上が経ち、少しずつではあるが、ほとんどの住民にとって生活の基盤となる海の仕事をようやく再開されつつある。とはいえまだまだ地

域再建までにはほど遠く、そんな折りに祭りや芸能の話など時期尚早であるとか不謹慎であるかと思われる方もきつといらつしやるに違いない。かく言う我々ですら、「住む家も無いやつらがこぞつて、なんとデータラメなんだ。」と感じることが度々あるのだから仕方ない。しかし、こんなときだからこそあえてやらなければという使命感も同時に感じている。先にも述べたように、十三浜という地域は誰もが訪れるような観光地ではなく、余所から人が遊びに来るとのこと自体が非常に珍しいところである。そのため、たまに客人があれば、過剰とも思えるサービスでおもてなしをするというのが、どこかしきたりのようにもなつていた。しかし、今の我々やこの地域にはあまりにも何もなく、それはここまでずつ



このような面を使用します



津波が去った直後の大室です

と支えてきてくれたボランティアの方々に対しても、何のお礼もできていないという、大きな大きな負い目となっている。とにかく何かで喜んでいただきたい。下を向いていた私達がこうして何かに取り組む姿勢を見せることで、少しでも感謝の意を伝えたい。そして何より、バラバラになつてしまつた地域の人のよりどころとなり、どこかに「もういいや。もうダメだ。」と思つてしまつていく年輩の方々がいるのならば、わずかばかりの光となることのできればと考えている。

かつて子供神楽を舞つていた二〇代から三〇代が中心となり、復活に向けた取り組みが活発に行われている。それはまず、入手先はおろか正式名称すら知らない道具を集めることから始まり、あらゆる情報を得るために各地を飛び回り、多くのの人々と出会うことで、自分達の知らなかつた事実や歴史を学ぶことができるという、非常に有意義な活動となつている。ここではとてもご紹介しきれないが、そのドタバタぶりが意外に好評であり、詳しくは大室南部神楽保存会のホームページをぜひご覧いただきたい。

「辺境」「異境」の地としてのケルトと東北 —共通する「気」—

プロフィール

古山拓(ふるやまく) 岩手県出身・宮城県仙台市在住。水彩画家・イラストレーター。個展と広告イラストレーションの二本柱で活動。東北とケルトの地を描く事で独自のアイデンティティを模索中。

www.fermnet.co.jp/
furyama/
trumpet-fugboatseesaa.net
facebook.com/yakufuryama



古川拓氏



私が惹かれるケルト文化が残る地とは、果たしてどんなところなのだろう...。そう思われている方も多いと思う。そんなわけでちょっと地図を描いてみた。(掲載地図参照) 見ていただくとうわかれると思うけれど、要はヨーロッパの「はしっこ」だ。

言葉で言うなら、アイルランド全体、イギリス本島の周辺部、フランス西部、スペイン西部といったところか。今、ケルトの地というとおおまかには前述のエリアをさす事が多い。ケルトの歴史は複雑な

古代ケルトの遺物が最初に見つけられたのは、スイスのハルシュタット。その後、ヨーロッパのあちこちで独特の文様が施された剣や兜、お墓がみつかり、いわゆる「ケルト文明」の存在がわかってきたようだ。ちなみにケルト民族が歴史に登場したのは紀元前六世紀ごろ。地中海世界では古代ギリシャの民主制がはじまりかけていたり、中国では春秋時代、日本では弥生時代が始まるかどうかといったあたり。そんな時代だ。ハルシュタットの地面の下から掘り起こされた歴史に存在が明らかになってきたケルト民族は、歴史のうねりのなか、民は動き、ある

で、詳しい事は歴史書に譲る。簡単に言うなら、大昔、かつての古代ギリシャローマにルーツを求めたいわゆる西欧スタンダードな世界とは、異質ゆえにぶつかる運命にあつた人々だ。

ものたちは混じり合い、あるものたちは消えていった。今その民の文化が形どうある息づいているのは、先に述べた西ヨーロッパ周辺部だ。以上おおざっぱにケルトの概略をのべてみた。(すみません、歴史の教科書になつてしまいました。)

しかし、地図上のケルトの地を見て、ぼつとエリアイメージがわく人はどれだけいるだろう。たとえば「ローマ」といえば「コロッセオ」、「ギリシャ」なら「パルテノン」、「パリ」から連想する「ノートルダム」といった「ああ、あの国ならこんなものがあるよね」と、ごく一般の人の想像できる観光モチーフを、はたしてイメージできるだろうか? 多くの人の心にとつては想像の外の地方、国のような気がしないか。

ここで、話はようやく東北に繋がってくる。そんな多くの人がイメージしにくいケルトの地を旅してきた、あらためて似たような「気」を感じるのが、自分の住まう東北なのだ。「気」はもちろん、気候や気温湿度といった大気のみならず、前回綴ったランズエンド、すなわち「地の果て」もその一つだ。

何度も言うが、ケルトの地はヨーロッパ周辺部、うがった言い方をすれば「辺境」「異境」だ。ちなみに、フランスのブルターニュ地方はフランス人自身が異境と表現する地でもある。かの地にあるフィニステール県といった呼称はその人々の意識の現れの一つだろう。ブルターニュのみならず、ケルトの地の各所にそれは見て取れる。前回綴ったランズエンド、すなわち「地の果て」もその一つだ。

それでは、日本の言葉に「辺境」「異境」を置き換えるなら、どう表現されるのだろうか? そう、「陸奥」すなわち「みちのく」だ。

今ほど人の行き来がたやすくなくなつた昔、だれもおそらく抱いていた「見知らぬ果てへの憧れ」。それは、洋の東西を問わず、人の深い意識の底に眠っているような気がしてならない。日本固有の文化である短歌や俳句の歌枕によみこまれたみちのくの地名の多さにも、わたしはその思いを強くする。

人が「遠く遙かに思いを馳せる地」が、ユーラシア大陸をはさんだ西と東のさらに辺境に横たわっている。ケルトの地とみちのく東北を目に見えない糸で繋ぐこと。そしてケルトの地にある、東北にはない何かを探る事が、私にとってこの先、生きるヒントになるような気がしている。(続く)

だ。フランス西部のケルトの地、ブルターニュ地方も「ああ、ワインの美味しいところね」と何度言われた事か。すみません、それは、ブルゴーニュです。スペイン西部のケルティックランド・ガリシア地方の話は振ったとしても、ケルト音楽にアンテナが立っている方以外、ほとんどが目が点最近ようやく「サンチャゴ巡礼の道」がメディアで紹介され、ちよつぷり知られてきたけれど、それでも大方の認知度はまだまだだと思ふ。ケルトの地とは、そんなイメージしにくい地といつてもいいかもしれない。(最も、ここ一〇年ちょっと、ケルト音楽が大きな流れになってきているので、音楽でその名を知っている方は多いかもしれない。)

しかし、話しようやく東北に繋がってくる。そんな多くの人がイメージしにくいケルトの地を旅してきた、あらためて似たような「気」を感じるのが、自分の住まう東北なのだ。「気」はもちろん、気候や気温湿度といった大気のみならず、前回綴ったランズエンド、すなわち「地の果て」もその一つだ。

何度も言うが、ケルトの地はヨーロッパ周辺部、うがった言い方をすれば「辺境」「異境」だ。ちなみに、フランスのブルターニュ地方はフランス人自身が異境と表現する地でもある。かの地にあるフィニステール県といった呼称はその人々の意識の現れの一つだろう。ブルターニュのみならず、ケルトの地の各所にそれは見て取れる。前回綴ったランズエンド、すなわち「地の果て」もその一つだ。

それでは、日本の言葉に「辺境」「異境」を置き換えるなら、どう表現されるのだろうか? そう、「陸奥」すなわち「みちのく」だ。

今ほど人の行き来がたやすくなくなつた昔、だれもおそらく抱いていた「見知らぬ果てへの憧れ」。それは、洋の東西を問わず、人の深い意識の底に眠っているような気がしてならない。日本固有の文化である短歌や俳句の歌枕によみこまれたみちのくの地名の多さにも、わたしはその思いを強くする。

人が「遠く遙かに思いを馳せる地」が、ユーラシア大陸をはさんだ西と東のさらに辺境に横たわっている。ケルトの地とみちのく東北を目に見えない糸で繋ぐこと。そしてケルトの地にある、東北にはない何かを探る事が、私にとってこの先、生きるヒントになるような気がしている。(続く)



「アイルランド憧憬」4号 アイルランド・アラン島



「Funtime」6号 フランス・ブルターニュ・ヴァンヌ(個人蔵)



「まほろばの春」5号 岩手・平泉・達谷窟毘沙門堂西光寺を望む

2013 オリジナルカレンダー「インドへの旅」通信販売のご案内

毎年販売しておりますカレンダーを通信販売いたします。頒布価格は一部¥1,050(税込)おかげさまで好評につき残部僅少となりました。売り切れが予想されますので、お早めのお申し込みをお待ちしています。お支払いは同封します郵便振替用紙でお支払ください。ご希望の方は、メールアドレス lands-f@fc4.so-net.ne.jp 古山まで。件名に「2013 カレンダー希望」とお書きの上、本文に、お名前、ご住所、電話番号、希望部数を記載してお送りください。



【ニッカ美術蔵】のご案内

仙台ニッカサービス企画による、染織作家、ガラス作家、書家と古山による四人展【ニッカ美術蔵】が開催されます。古山は、河北新報に連載した水彩エッセイ「子規の風景」から、正岡子規の宮城旅を辿った原画を額装、ダイジェスト展示。会期/2012年11月17日(土)~11月29日(木)午前11時~午後4時 会場/ニッカウヰスキー(株)仙台工場内 「ギャラリー宮城峡」 〒989-3433 仙台市青葉区ニッカ1番地 電話 022(395)2865 株仙台ニッカサービス(今回の展示会場では展示のみとなり、絵の販売はございません。また会期中で古山が会場に入る予定は11/18(日)と23(金・祝)の二日間です。ご了承ください)

「東北独立」論から10年

野田一夫氏の「東北独立」論

野田一夫氏が「東北独立」を提唱してから、今年で十年になる。長年に亘り、大学教育の改革、企業経営の改革を推進してきた行動派の経営学者として知られる氏は、宮城大学の初代学長として一九九七年から二〇〇一年まで仙台におられた。それまで約六〇年東京で暮らした氏だが、盛岡は父祖の地であるとのことで、宮城県に県立大学を創設する際に協力要請に応じたのも、「東北の都」である仙台に素晴らしい大学を創りたかったからだと振り返っておられる。

ところが、実際に宮城大学の学長として仙台に赴いてみると、それまで知らなかった東北の姿が見えてきた。特に、中央権力との関係における東北人の不甲斐なさに驚きと怒りを募ら

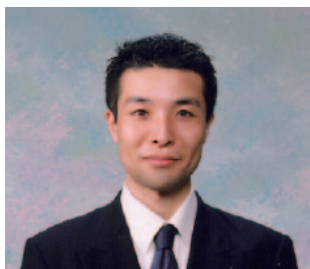
せたそうである。氏は言う。「田村麻呂の蝦夷征伐から戊辰の役までの約千年間に、東北は中央権力によって実に五回にわたって故なき攻撃の対象とされながら、只の一回も反撃勝利を収めえず、屈辱的支配に服した。維新から今日までの百数十年間、わが国は日清・日露戦争および第一次大戦後と、太平洋戦争後と二回にわたって工業化による目覚ましい経済発展を遂げたが、その間東北は常に『食糧と労働力の供給基地』という裏方に回され、不当な貧しさに甘んじた」。

その上で氏は「私は『東北の独立』を視野に入れた自主的な東北の開発を、断然志向したいのだ」と主張し、次のように述べる。「府県は事実上日本政府の出先機関にほかならないから、東北を七県によって構成された一地域と考えるかぎり、東北はこれからも経済

的には日本国中最も恵まれることのない辺境に甘んじさせられるのが歴史的運命に思える。それより、一時の空しい豊かさの後にいま早くも頹廃と混沌の道を急ぐ日本国と決別し、東北人の総力を結集してもっと健全で、国際的にももっと魅力のある国家の建設を目指すべきだ」と。

執筆者紹介

大友浩平
(おおともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagmasi/



大友浩平氏

Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ohtomo

今年四月に刊行された氏の最新刊である「悔しかったら、歳を取れ！〜わが反骨人生」(幻冬舎ゲーテビジネス新書)の中で、氏は「仙台で何を……？」といぶかる東京の友人たちを「東北独立運動をしている」と煙に巻いたエピソードなどを紹介しながら、「目下の僕の抱負」として、「淡路共和国」建設を通しての「日本再生」を高らかに宣言しておられる。

「東北独立」の現況
「独立」への歩みが遅々として進まない東北に嫌気が差したのか、氏は東北から次第に距離を置き始めたように見えた。その後も秋田の国際教養大学や今年開学した東京の事業構想大学院大学の創設に関わるなど、八五歳になった今でも氏のその獨創性や行動力に全く陰りは見られないどころか、さらに磨きがかかったとすら感じられる。とりわけ私が感嘆したのは、東北で牛歩の如く動かなかつた「独立運動」を、氏は縁あって淡路島に所を変えて継続しておられたことである。

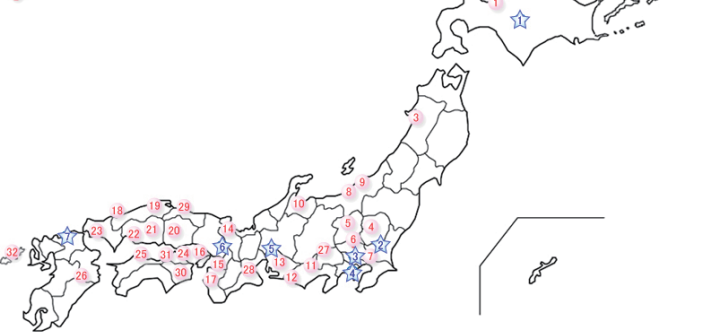
「総合特区」に見る「東北独立」の現況
「独立」への歩みが遅々として進まない東北に嫌気が差したのか、氏は東北から次第に距離を置き始めたように見えた。その後も秋田の国際教養大学や今年開学した東京の事業構想大学院大学の創設に関わるなど、八五歳になった今でも氏のその獨創性や行動力に全く陰りは見られないどころか、さらに磨きがかかったとすら感じられる。とりわけ私が感嘆したのは、東北で牛歩の如く動かなかつた「独立運動」を、氏は縁あって淡路島に所を変えて継続しておられたことである。

ことを「売り」にしている。また、構造改革特区が地方公共団体のみを対象としたのに対し、総合特区では企業なども含む「要件を満たす地域」にその対象を拡大し、また国と実施主体の「協議の場」を設け、国と地域が一体となつて推進することを目指している。

「淡路共和国」への道程
さて、野田一夫氏が挙げておられるシンガポールはマレーシア連邦から独立を果たし、リー・クワンユー初代首相の下、短期間に驚異的経済成長を遂げた。人口は五〇〇万人を超え、一人当たりGDPでも二〇〇九年に日本を抜いてアジア一となっている。シンガポールの国土の面積約七〇〇平方キロメートルに対して、淡路島も約六〇〇平方キロメートルとほぼ同じ「国土」を持つ。しかし、淡路島の人口は現在、わずか約十四・五万人である。高齢化率でも日本の平均を遥かに上回る、超高齢社会を絵に描いたような地域である。

「総合特区」は、小泉政権下で生まれた構造改革特区が個別の規制の特例措置を対象として、税制・財政・金融措置はその対象としなかったのに対して、複数の規制の特例措置に加えて税制・財政・金融上の支援措置などを総合的に実施する

総合特区一覧マップ



市、洲本市、南あわじ市の三つの市から構成されることになった淡路島は、日本列島の中心部に立地している。それだけでなく、世界第四位の規模を持つ関西経済圏に近接し、気候は温暖、地勢は穏やかで、風光明媚である。そして、「やり方いかんでは、『一国』としては最高の条件を具備している」と確信しておられる。

「淡路共和国」の認可取得
①総合特区の認可取得後速やかに、あくまでも非公式ながら「共和国」を宣言する。
②三市長は互選または交代制で大統領および副大統領を名乗り、自覚を強める。
③日本国憲法の趣旨に沿い、より具体的・魅力的な「淡路共和国憲法」を制定する。
④あらゆる形の「自治権」を絶えず実質的に拡大することに努力しつづける。
⑤魅力的な政策を果敢に実行することにより、国内外から各種の有為の人財を集める。
⑥社会の活性化↓経済的繁栄を実現させ、日本に「共和国建設ブーム」を引き起こす。
⑦究極的には、日本国を「多種多様な個性に溢れた共和国によって構成される、日本連邦(The United Republics of Japan)」化

「私にとって、『東北の独立』は今や幻想でもなければ願望でもなく、残りの人生をかけた一大事業なのである」と主張しておられた氏から見て、今の東北がど

のように映っているのか、今なお「独立」を進めるとすればどこから手をつけていくのがよいのか、一度お聞きしてみたいとかねてから思っていた。そうしたところ、折しも去る一〇月二六日、仙台市内で氏の講演会が開催された。講演会の中では質疑応答の時間はなかったが、その後に懇親会が催されたので、ここぞとばかりにその場で、短い時間ではあったが氏に「東北独立」について改めて尋ねてみた。

氏からは、「東北はあまりに大きい。まずは淡路島のように小さく限定された地域で実績を重ねてそれを周辺にも広げていくという戦略で臨むべき」、「君のような若い意欲もある人が中心となって進めていかなければ結局のところ何も進まない」といったアドバイスをいただいた。その上で、「協力は惜しまないから、いつでも東京の事務所を訪ねていらつしやい」と、とてもありがたい言葉もいただいた。

氏によれば、淡路島以外にも「独立」に向けた歩みを進めている地域があるそうである。同時多発的にそうした取り組みが進んでいけば、国の統治機構の改革にも過たずつながっていくのではないかと思える。そのため狼煙を東北からも上げていかなければならぬ、と改めて考えさせられた。

国の統治機構改革につながる狼煙を東北からも

「私にとって、『東北の独立』は今や幻想でもなければ願望でもなく、残りの人生をかけた一大事業なのである」と主張しておられた氏から見て、今の東北がど

『中東北』に何ができるか

西暦二〇三三年。東日本を再び激震と津波が襲い、青森県の大間原子力発電所及び、宮城県女川原子力発電所が国際評価レベル7の爆発事故を起こした。

津軽海峡を隔てるもわずか三〇キロの距離にある対岸・函館市周辺住民はパニックの中道内各地へ避難したが、風向きは変わり南の青森県全域、秋田、岩手両県をも広く汚染するに至った。女川原発もまた宮城県全域から周辺県を広く汚染。かくして東北地方において放射能汚染を軽症に留めるのは、奥羽越現像の故地・山形県庄内地方だけになってしまった…とさ。



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出だし演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当。

「あんな事が何度もあったら、誰も『そんな事はあり得ない』とも言い切れないだろう。」

こうして庄内には、北東北からも宮城からも大勢の避難民が押し寄せ、人口減少に憂いていた地はあたかもアメリカ西部か北海道の開拓時代のような活況が訪れる…わけもなく、避難民は庄内を素通りして関東や関西に向かい、もとより大数の住民は避難すらできず、高濃度放射線の中で生活を続けざるを得ない。

一番、書きたくない一行を書きかけた。しかし、既に事が起きてしまった福島県を南に、懸命に原子力を推進してきた今更引き返せないという青森県を北に控える東北は、「東北はひとつ」を理想とする人間からすると、心身ともに現実には相当な重症患者である。

青森県と、北海道渡島地方は古代から同一文化圏として関係の深い間柄のはずなのに、青森県側には配慮が失われているように思われてならない。中央との従属関係、利権構造が人を鈍感にしたのか？孤立しようとする青森県に対し、未だ「軽症」の形は保つ秋田・岩手・山形そして宮城、通称『中東北』(私の勝手な命名です)は何ができるのか。

そもそも、福島県に対しても何もできていないのだ…

想像してみよう。秋田や宮城が、青森に「皆で原子力を何とか終息にもつけないか」と持ちかけたなら、何が起ころうか？「余計な口出しをするな」という事で、東北内で確執・断絶となるのか。

その前に、なぜ東北の内輪で説得しようとかいう話になるのか、不思議に思うかも知れない。確かに全国的には、県単位にアイデンティティを持ち、物事を考える人々が圧倒的に多い。政治家やマスコミは、テロトリーが明確な分、まず「我々関東人は」と切り出す事がない。己が分をわきまえようと思うからだろうし、例えば栃木県の人

は隣県・茨城との対立関係とか、東京との都会対田舎的比較論とか、ほとんどの論点が県単位を基準にしてある。関東地方の一部ではあるが、それはあくまで便宜上の事で、「関東」は云々ば栃木のサブタイトルに過ぎないのだ。高知県でも土佐・高知としてのアイデンティティが強く、「四国」がサブタイトルであるどころか、日本全部がなくなっても高知があれば〇

K、と豪語して憚らぬ土地柄である(この辺り、国がなくなっても自分の町さえ無事ならいい、というイタリア人に似ている)。これを考慮すれば、青森には青森の事情がある、というのも当然のようでもあるが、どうも東北の場合、違う気がする。「岩手県は」「山形県は」と言っているだけでは済まない何かが、この地方にはあるのだ。一体、それは何なのか。

東北は、古く広大な蝦夷の国の時代から外部より「奥州」「奥羽二国」と呼ばれるに始まり、後にくつもの分割を経て現在の六県に至ったので、東北に「つてはむしろ「県」という概念こそがサブタイトルなのだ、と言えると思う。

私個人としては、日本がなくなっても山形県さえ無事ならいいか、というところが思えないし、世界で一番好きな場所と思う岩手県でさえ、こだけ残っても駄目だと言いつつ、日本がなくなっても東北があれはOKか、というYESかも知れない(他地方の方、ごめんなさい)。県単位で考えてはどうか物足りないし、完結できない気がする。それが他地方にはない、東北の特色ではないかと思うのである。

だから、原発事故が「フクシマ」の問題とされてきたり、青森県が単独で原子力政策を云々したりするの

がどうも不自然で、気持ち悪くて仕方ない。山形県の問題を、「日本全体の問題」と言う人がいたらいかにもウソっぽい(笑)。東北の他県が、「東北全体の問題」と言ってくれたら素直に嬉しいと思う。福島県だって、青森県だって、同じ気持ちではないのだろうか。

青森県に限らず、「原子力ムラ」を抱える地域を孤立させる原因には、地域内の徹底した洗脳政策があり、人々は原子力を推進してきた政策の仕組について疑問を投げかけ、方針転換を迫るきっかけ、手立てすら奪われていると言われる。そうした現状を、同じ東北だが原子力施設を持たない山形県も、青森をそのような状況へ陥れたはずの東京、そこに住む膨大な数の人々も、知る由もないのだ。

このブラックボックスのような状態にある地域が、単独で現状からの脱却を果たすのは困難であろうし、外部からの何らかの働きかけが重要と考えられる。大間の対岸・函館市は青森が原発建設を強行するならば法的措置を以って挑むと宣言しており、青森県への大きな牽制にはなるだろうが、それだけでは不十分だ。青森の懐深く入り込み、人々の内面に問いかけて議論を始めたい。それができるのは、既に傷ついた福島県、そしてその両脇を支えている、この『中東北』の同胞のみである。

以下は、原子力に関して交わされる、彼らの語らいの一例である。架空であるし、多少ふざけているが、私自身、議論の行方は知らない。

山形・原子力推進を止める事ができない、という理由に、日本が核兵器を持たないという建前で実は「いつでも作れる状態にはあるんだぞ」という暗黙の脅威を世界に示す為、というのがあるというのは本当ですか。

青森・原子力と核兵器を一緒にしないでくれ、全く。秋田・確かに大陸列国との外交は緊張状態だしね。現状、アメリカの軍事力の庇護下にある日本だけ、この属国的立場を拒絶して米軍基地も撤収させたら核保有だという話になるのかな。

新潟(友情出演)・「東北の独立」どころじゃない。日本は軍国化して東北は再び兵隊と食料、資源の供給地にされる食糧の湧かないシナリオのリメイクですな。福島・そうすると、まさに俺達は混沌(カオス)の中に生きていると思う。十数年前ならば海外に出て初めて「世界には大変な状況の国がある」と認識できたが、今は自分が住んでいるこの国でそれが実感できる。人々の想いが生かされず、裏切られ、混乱し崩壊していかうとしているのが、現在の日本だよ。

宮城・ところで、僕はちよど十年前に、六年間の「正社員」としての生活を捨てた。以来、長い旅や芸術の追求のためアルバイトはするが、正社員になりたかった事は四〇過ぎた今まで一度もない。

秋田・おい、何の話だ？ 中年フリーターが。

宮城・まあ、聞いてくれ。もちろん、異論はあるだろうけど、僕にとっては、「正社員でなければダメだ」という主張が、「核兵器を持たねばダメだ」と言うのとほとんど同じに聞こえるんだ。(会場、騒然)つまり、さもないと「生活できないなるかも知れない」と「何の保証もなく不安」だという強迫観念で共通しているんだ。「普通の人は皆、正社員だから自分も」と「他の国も核兵器を持っているから我が国も」全く同じく聞こえないか？

山形・私は、生活を安定させた方が、趣味に打ち込めると思うけどなあ。宮城・趣味じゃない、芸術なんだ！失礼。とにかくこの社会は、「何の保証もない」事への不安と、強迫観念でできているようなもので、今や世界中がそれらに縛られて、おかしな事になっているんじゃないかと思う。「本当にこうありたい自分」も「本当に目指す国」も放棄して、嫌な事はガマンする、目をつぶる、自分も他人もだます。その結果、やがて失ったものの大きさに気づくが時すでに遅し、なんだ。僕は、やりたいと思う事のために他人がどう思おうと、その先にどんな結果が待っているよと、まっすぐ生きてきたつもりだ。その信条は、先の震災を経てより強固になったように思うし、多くの被災者、心に衝撃を受けた人々からも、生き方を見直すきっかけになったという声を聞いている。皆は、どうなんだ？

青森・何が言いたい？強迫観念を捨てて核を放棄し、丸腰になって中国北朝鮮の餌食にでもなれと？

山形・やっぱり、核だっただけだね。

青森・そうじゃなくって！もう、兵器の話はやめて！もう、兵器の話はやめて！もう、兵器の話はやめて！もう、兵器の話はやめて！もう、兵器の話はやめて！

岩手・私は大それた事は言えませんが、ひとつだけ、東北人という立場からのみ言えます。それは、「東北は実際に何度も『大和』の餌食になってきました。」(会場、爆笑)例えば、東北の絶頂期と言われた平泉時代の終わり、奥州藤原氏は二十万近くの兵を持つと言われながら、三十万近い源頼朝の軍に対し、わずか二万の兵しか出さなかった。これは兵がいなかったのではなく、戦う意志はなかった。これは兵がいなかったのではなく、戦う意志はなかった。これは兵がいなかったのではなく、戦う意志はなかった。

新潟・まあまあまあ…東北って、仲悪いよね。青森・全く、何しに来たのだ、お前たち。滅ぶたの何だの縁起でもない。原発と生きる地域の事は所詮他人事だろう。なあ福島殿。@福島・他人事なら、ここには来ない。俺もこいつら「中東北」に引張られてようやく来たんだ。全く、おせっかいな奴らだが。@新潟・まあ、生きるも死ぬも一緒という事で。皆で考えていきましょう。@秋田・何であんたがまとめる！

自然と絆について思うこと



踊り終えての笑顔

人は何時頃から自然に対する畏敬の念を忘れてしまったのかとこの頃時折考へる。

阪神淡路大震災、そして、今回の東北大震災等々の地震や台風。昔は異国の災害であった竜巻までもが発生するようになった。地すべりも昔の地すべりでは

て、今回の東北大震災等々の地震や台風。昔は異国の災害であった竜巻までもが発生するようになった。地すべりも昔の地すべりでは

執筆者紹介

YASUYUKIは、世界中を旅してきました。彼は、世界のひととすぐ友達になる不思議な能力を持っています。彼の略歴は、下記に書かれています。が、何の意味もありません。何故なら、彼は、未来に飛んでいく人だからです。



YASUYUKI氏

経歴

一九四六年生 出身奈良県
一九七〇年 メーカーに入社
二〇〇六年 メーカーを定年退社
旅行作家・旅行コンサルタント
(社団法人日本旅行作家協会会員)
ファイナンシャルプランナー

人間の営みは変化する

しかし、自然の神は依然として存在し、人間の意志とはかわりなく喜怒哀楽を表わす。

科学は、この堤防を築けば大丈夫だと自然をコントロールしたかのよう論調の話をする。カリフォルニアの地震の際、高速道路の橋げたが落ちた。それを、日本ではありえない話をした直後に、阪神淡路大震災があり、高速道路が横

なく、山々全体が崩れ去るものが発生している。山の民、海の民がいなくなり、総中流化の時代の中でコンクリートの箱とプレハブの家の中で四折々の変化にも鈍感になってしまった自分を感ずる。

本来、人は、自然の営みの中で生活してきた長い歴史を持っている。自然から恩恵を受け、自然に感謝するとともに、自然の恐ろしさを体どころか感じながら生活してきたのである。だからこそ、昔から日本人は、自然を神として崇め、災害が無いようにとの思いで神々への願いと感謝をこめて数々の祭りごとをしてきた。

多くの祭りがイベント化され、本来の自然への畏敬の念が薄れるのは無理からぬ面があるのかもしれないけれど、昔からの素朴な祭りは残して行きたいものである。



津波で何もかも破壊された集落

転してしまった。阪神大震災は、直下型の地震でカルフォルニアのとは違うと説明された。今回もあれだけの津波対策があるから大丈夫だと思っていたらそれ以上のものがきてしまった。想定外のものが来れば天災になる。神の怒りのもっともかもしれない。もともと地震大国で、幾たびかの地震や津波を経験している国なのである。いつどのような事があるか、詰める事は必要だろうか、これで大丈夫と教えるのは、自然に対する不遜な考え方だと思ふ。

東北大震災の結果、『絆』という言葉が彼方此方使われている。この意味するところは、助け合いの精神という事であろうと思われ。助け合いの精神は、どのようなに育まれるのであろうか、昔は、一人では



神輿に何をか祈る

生活していくのが困難で、お互いに助け合う労働を介して精神が育まれていたであろう。地域力という言葉も言われるが、その基盤は、そのような具体的な事柄を介して醸成されるものでなくては、絆の中身が伴わないと思ふ。

大都市圏に住む私自身も、絆づくりに向けて考えなければならぬ。「助け合いの精神」が、大地震が来てから作り上げていくのでは、神に対して申し訳ない。その為に、先ずは、自身自身をさらけ出し、具体的実行をすることから始めてみようと思つてゐる。

☆革物屋☆

かわもんや
<http://prewords.jp/>
E-Mail: contact@prewords.jp
TEL/FAX: 042 (562) 3507

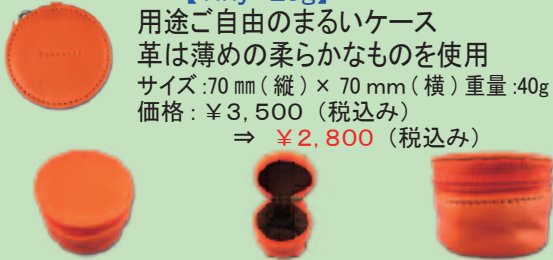
Prewords

新聞創刊
ディスカウント
(20% OFF)

※カラー展開はそれぞれ5色
オレンジ：鮮やかな橙色、使い込んだ後の渋みが楽しみ
キャメル：5色の中で最もヴィンテージ感のある色合い
ブラック：スタンダードな黒、ビジネスにもプライベートにも
ワインレッド：落ち着いた大人の赤
グリーン：深みのある優しい緑

【Tiny Log】

用途ご自由のまるいケース
革は薄めの柔らかなものを使用
サイズ:70mm(縦)×70mm(横)重量:40g
価格:¥3,500(税込み)
⇒ ¥2,800(税込み)



【Tiny Dice】

用途ご自由の四角いケース
革は薄めの柔らかなものを使用
サイズ:70mm(縦)×70mm(横)重量:40g
価格:3,500円(税込み)
⇒ ¥2,800(税込み)



【Handy Pouch】

モバイル機器収納など、用途は自由自在
革は薄めのやわらかいものを使用
手触り感を重視
サイズ:105mm(縦)×210mm(横)×60mm(奥行)

価格:7,800(税込み) ⇒ ¥6,240(税込み)



郷土芸能と東北復興を考える ①

(公益社団法人)全日本郷土芸能協会職員
かつ行山流舞川鹿子踊り踊り手である

小岩秀太郎氏の講演から

「自然と人と地域をつなぐ郷土芸能の力
供養と神事の芸能—鹿踊を中心に—」

プロフィール

一九七七年 岩手県一関生まれ
一九九六年 岩手県一関第一高等学校卒業
その後、國學院大學卒業、国立台湾師範大學留學
行山流舞川鹿子踊の踊り手
公益社団法人全日本郷土芸能協会職員



小岩秀太郎氏

震災からの再起はなぜ「祭」の復活なのかという疑問

はなぜなのか、生活の再建を後回しにしても祭・伝統芸能復活を優先するのはなぜかと筆者も考え続けてきたが、その答えをこのセミナーと講師は与えてくれた。筆者はセミナー受講にとどまらず、セミナー終了後にはさらに個別に講師に取材した。やはり奥深い理由があったのだ。それを今回号と次回号の二回連続で取り上げ、東北復興のパワーとしての祭・伝統芸能の真の姿に迫っていきたくと思う。

全日本郷土芸能協会

このセミナーは、十一月十日(土)、池袋にある淑徳大学の池袋サテライトキャンパスで開催された。とりまとは「TOKYO URBAN LIFE 2012」という団体であるが、その講師を務めたのが、公益社団法人全日本郷土芸能協会の小岩秀太郎氏である。講座のタイトルは「自然と人と地域をつなぐ

郷土芸能の力 供養と神事の芸能—鹿踊を中心に—である。

この全日本郷土芸能協会という団体は、日本各地にある郷土芸能の振興と育成を目的として一九七三年に創立され、二〇一二年三月に公益社団法人として認定を受けた。主務官庁は内閣府で、主な活動は、国際文化交流、民俗芸能の公演・展示の場のプロデュースなどであり、震災以降活発に活動している団体である。

講師紹介

小岩秀太郎氏

講師の小岩氏は岩手県一関市舞川地区に伝わる「行山流舞川鹿子踊(ぎょうざんりゅう・まいかわ・ししおどり)」の現役の踊り手でもあり、また同時に公益社団法人の全日本郷土芸能協会の職員でもあるというユニークな経歴の持ち主で、今般の大震災で被災した各地の伝統芸能復活にあちこちをエネルギーに

駆け回っておられる。

しかもその支援範囲は、ご専門のしし踊りにとどまらず、南部神楽はじめさまざまな神楽、地芝居、虎舞など多方面に亘る。

筆者の第一印象では、内閣府所管の公益社団法人のお堅い職員ということから連想されるイメージとはまったく異なる「舞川の熱く燃える鹿(申し訳ありません)」といった感じの方である。ちなみに、仲間内では熱心なしし踊り関係者のことを、尊敬を込めて「鹿馬鹿」と呼ぶらしい。まさにその呼称そのものである。(またまた失礼)

伝統芸能復活支援

多くの被災地域では、震災直後、関係者が流された祭の衣装や道具を必死に探し歩いたという。でもほとんどは見つからず、皆途方に暮れたという。しかし、あきらめきれず何とかしたいという声に答え、あ

ては、新たに衣装や道具を再調達する方法を保存会とともに探し、手配し、他方、再調達に要する資金の手当て、助成金の獲得も手伝ってきた。被災した保存会からはいざというときに頼れる強力な助っ人である。

またこの衣装・道具類の再調達にあたっては、分派して兄弟関係にある郷土芸能同士の連係も強力だったという。今般の大震災では、沿岸部にある郷土芸能保存会の多くが被災したが、内陸部にある兄弟分の保存会がバックアップするという

ことも多々あったという。現に、小岩氏の所属する舞川鹿子踊の会長などは、鹿子躍発祥の地でもあり、いままでも交流のあった宮城・南三陸町の水戸辺(みとべ)の鹿子躍保存会に、必要なしし頭頭分を、通常の製作スピード以上のスピードで作成り上げ贈ったという。また衣装も他地域で再製作され、鹿の角も長野、兵庫から、馬の毛も北海道から集められたという。そうしたさまざまな協力があった、この水戸辺の鹿子躍が震災発生から程なくして復活したのだ。

こうした郷土芸能同士の横の連係も、この震災以降活発化しているという。

理屈ではない、身体に染み込んでいく感覚

こうした支援経験 踊

り手としての経験に裏打ちされた小岩氏の洞察にはいちいち納得させられた。

例えば、しし頭には、「華鬘(けまん)」という仏教風の飾り物がついていたり、背中に背負う長い「サラ」は地面に叩きつけて悪魔を追い払うとか、腰から下に垂らす「流し」には「南無阿彌陀仏」の文字があつたりする。

つまりは、しし踊りは長年伝えられ、身体に染み込んだ宗教的な儀式であり、慣習であつた。そこには仏教や神道の宗教理論があるわけではないし、神仏習合だとか非難することもない。あわせて五穀豊穡を祈願しても自然である。それほど至極シンプルに、身近な習俗であつた。

したがって、震災前までは、供養だ、神事だと騒ぎ立てずに、年中行事のひとつとして行われていた。

た。それが突然震災で中断した。いままであつた、あるべきものが急に無くなった状態である。祭・伝統芸能の復活とは、まずは、生活に組み込まれたものを取り戻すということなのである。

盆供養が終わらなければ犠牲者への供養は終わらない

もちろん、震災前、お盆には各家々を回り、ご先祖様、あるいは亡くなった人を供養していた。それがこの大震災では、とてつもなく多くの人が亡くなった。当然のことながら、これまでの年中行事のひとつではなく、供養や「神事」という意味づけが強く

なつていくのは仕方ない。いずれにしても、お盆に供養できなければ、供養

が終わらず、あたり前の日常も取り戻せないことになる。日常を取り戻して、復興へと舵を切るためには、どうしても祭・伝統芸能を復活させなければならぬのである。だから、震災発生直後に言われたような、けつして自粛すべきイベントとしての祭ではないのだ。

また、長い歴史を経て出来た風習は、この大震災ではなお更のこと復活しなければならぬのである。それを大震災が起きたからといって、現世代で途絶えさせたら、きつと「ばち」があたる。そう思う関係者も多いだろうという。

生きとし生けるものすべてのものへ

先ほどの水戸辺では、今般の大震災であらためて注目されたものがあつた。それ

は何百年も前の供養碑であつた。不思議なことだが、津波はその供養碑までは呑みこむことはなかった。その碑に彫つてあつたのは、「奉一切有為法羅漢供養也」。意味は、この世に存在するすべてのものに、躍りをもつて供養したてまつる、ということである。自然やありとあらゆるものを敬い、感謝し、地域を結ぶその心を全霊をもつて躍りに託す。そんな昔の人がいたのだ。

いまこそ、その昔を思い起こし、郷土芸能に込められた知恵、生き方を学び直すことが必要ではないのか。(続く)

※小岩氏からのお薦めの獅子舞のイベントがある。十一団体も一同に会するのは初めてのことだ。ぜひお出かけになってみてはいかがだろう。



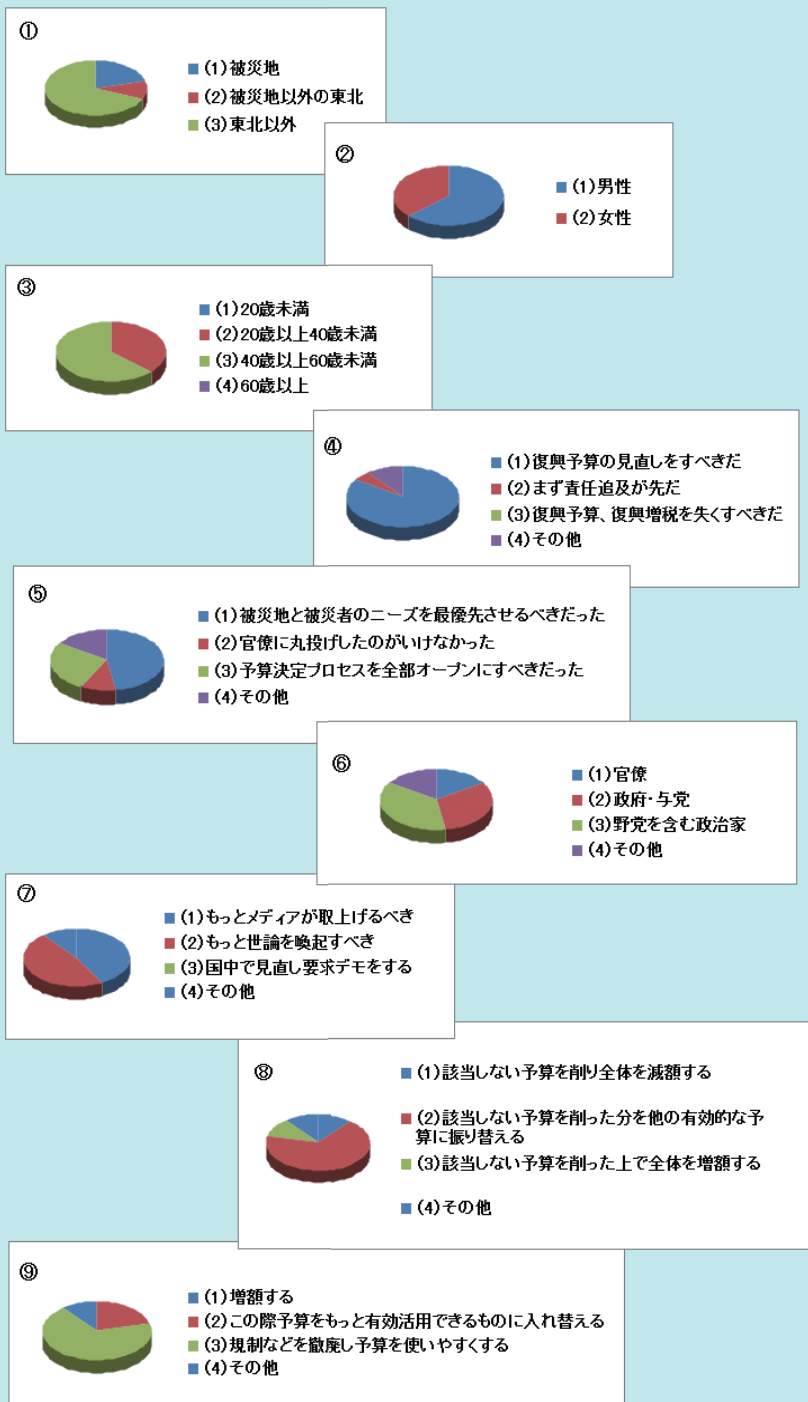
セミナー講師写真



獅子舞11団体が集まる初の試み

第5号 ネットアンケート集計結果 【 復興予算の使途問題について 】

No.	質問と選択肢	回答数
①	現在住んでいる場所	
	(1)被災地	4
	(2)被災地以外の東北	2
	(3)東北以外	13
②	性別	
	(1)男性	12
	(2)女性	7
③	年齢	
	(1)20歳未満	0
	(2)20歳以上40歳未満	7
	(3)40歳以上60歳未満	12
	(4)60歳以上	0
④	この問題に対するあなたの総合的な判断	
	(1)復興予算の見直しをすべきだ	16
	(2)まず責任追及が先だ	1
	(3)復興予算、復興増税を失くすべきだ	0
	(4)その他	2
⑤	復興予算の決定プロセスについて	
	(1)被災地と被災者のニーズを最優先させるべきだった	9
	(2)官僚に丸投げしたのがいけなかった	2
	(3)予算決定プロセスを全部オープンにすべきだった	5
	(4)その他	3
⑥	責任はだれにあるか	
	(1)官僚	3
	(2)政府・与党	6
	(3)野党を含む政治家	7
	(4)その他	3
⑦	予算見直し実現のために必要なこと	
	(1)もっとメディアが取上げるべき	8
	(2)もっと世論を喚起すべき	9
	(3)国中で見直し要求デモをする	0
	(4)その他	2
⑧	予算を組み替えるとしたらどうすればよいと思いますか？	
	(1)該当しない予算を削り全体を減額する	2
	(2)該当しない予算を削った分を他の有効的な予算に振り替える	13
	(3)該当しない予算を削った上で全体を増額する	2
	(4)その他	2
⑨	東北復興を推進するためには復興予算をどうすればよいと思いますか？	
	(1)増額する	0
	(2)この際予算をもっと有効活用できるものに入れ替える	4
	(3)規制などを撤廃し予算を使いやすくする	13
	(4)その他	2



今回のアンケートは復興予算の使途問題についてお聞きしました。被災地復興の進展がままならない状況のなかで、どうしてこんな事態が進行しているか、これからどうすれば良いのかなどについての質問でした。前回と同様の十九名の皆様からご回答いただきました。ご協力に感謝いたします。

まず、圧倒的に復興予算の見直しをすべきという意見が約84%。こうなってしまった責任は、野党を含む政治家がトップで、ついで政府・与党の二つを合わせて約68%、官僚の責任という意見はわずか三名だけでした。

予算見直しを実現するためには、世論喚起が必要という意見が最も多く、わずかの差で、もっとメディアが取り上げるべきという意見が続きました。

あらためて予算の組み換えをするとして、削った予算を他の予算に振り替えるべきという意見が圧倒的に多く、約68%。

今後、東北の復興を推進するためにはどうすれば良いかという設問には、規制を撤廃して予算を使いやすくするという意見が約68%で圧倒的多数でした。

注目すべき点は、責任は野党・政治家に責任ありと鋭く舞台裏を読んでいる点、また復興が進まないのは規制にあるとの二点でした。

◆ 知り合いの方に「文化芸術による復興推進コンソーシアム」という団体を教えてもらいました。これまでも東北の復興と祭の関係を考えてきましたが、外部連係を図るのも必要と思っていましたので、これ幸いと賛同団体に登録してしまいました。偉い先生方が参加しているもので、当新聞が会員になるなど無理と思っていたのですが意外や簡単でした。ミニ新聞単独では運動に限界があります。これからもどんどん連係して行こうと考えています。

◆ 当新聞を「東北復興」と名付けておきながら、今号ではあらためて「東北」や「東北人」とは何かと問いかけました。これはあくまで第一弾であり、これで終わりとは思っておりません。活発な意見交換が必要だろうと考えております。

同時に、どうして「東北」が一体化した復興運動が発生しないのかも考える必要があります。これだけの問題を抱え、なかなか進まない復興について何の騒ぎも起さないのが不思議でなりません。何かそうできない事情とかそうならない力学が働いているのでしょうか。単純に反応して行動できない、またはしない複雑な構造があるのでしょうか。しつこく追求すべき課題です。

編集後記

『東北独立』 砂越豊 著
価格：1,260（税込み）

時間が経過すればするほど『東北独立』という選択肢がより現実的になってくる

あなたの著者制作、お手伝い致します！
電子新聞発行のお手伝いを致します！
お気軽にご相談ください。

『立ち上ぐれ、オジサン！』 砂越豊 著
『もうひとつの構造改革』 砂越豊 著

※電子新聞創刊特別値引
上記2冊ともに 1260円⇒500円（税込）

遊無有出版 検索

遊無有出版 YUMUYU Publishing

立川事業所 042-512-9833
本社 042-562-3507

立川事業所 yumuyu@wj8.so-net.ne.jp
本社 contact@yumuyu.com